雑賀清子《さくら》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《やまぼうし》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《のぶどう》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《ふゆいちご》　田辺市立美術館蔵

## REPORT「湯川雅紀　2011-2022」

今年の4月から6月にかけて開催した特別展「湯川雅紀　2011-2022」は、和歌山県海南市の画家、湯川雅紀さんの制作を、ドイツ留学帰国後から現在に至るまでの作品によって紹介する内容で、留学中に描かれた小品やスケッチも含めて振り返りました。

会期中の5月14日と6月18日に、湯川さんによるアーティストトークを開催しました。湯川さんは、留学中に楕円をモチーフにして絵画の空間の問題をテーマとする自身のスタイルを確立したこと、帰国後はそのときどきに関心の向いた空間の問題について探究を重ねたこと、近年はこれまでの表現をベースに、自身ではコントロールできない部分や不確定な要素を積極的に取り入れようとしていることなど、制作に関わる様々なことを語ってくれました。

またエントランスホールにワークスペースを設置して、湯川さんにグレーの楕円を描いていただいた大きな紙を貼り出し、その上に思い思いのかたちに切った色紙（いろがみ）を重ねていって、みんなで一つの大きな絵をつくる試みも行いました。日を追うごとに色紙は増えてゆき、最終的には紙の地が見えないほどになりました（右の写真）。

来館者の方々によってつくられた
ワークスペースの大きな絵

（学芸員　知野　季里穂）

## 田辺市立美術館へのきもち㉗

「日本美術は接ぎ木のようなものだ。」これは私が田辺市立美術館の学芸員、三谷渉さんからうかがった言葉である。

2005年の夏、当時私はドイツで制作活動を行っていたが、夏休みに帰国し知人の紹介で田辺市（正確には隣町の上富田町南紀の台）にあるギャラリーで展覧会を開催していた。その展覧会場を三谷さんは訪れ、初対面の私に向かって上記のような言葉をはじめ、いろいろな考えを披瀝してくださった。和歌山県の田辺市という場所で、自分が常日頃ぼんやり考えていたことを明快な言葉で代弁してくれる人に出会えたことに私は驚愕した。

「明治以降の美術は無理やり接ぎ木したいびつな形になっているから、それを正すには外から日本の状況を俯瞰できる視点を持たなければいけない。湯川さんの作品にはそういう視点が感じられる。とてもユニークで、貴重な制作態度だと思う。」

三谷さんはそういうふうに私の作品を評価してくださった。かなり昔の話なので一言一句正確には覚えていないが、要旨は間違っていないと思う。

日本で美術を志すとどうしても西洋と東洋の違いに直面することになる。これは日本が明治時代に西洋文明を急いで取り入れたことに起因している。伝統的な絵画の歴史はいったん明治で切断され、その断面が洋画と日本画という二分野に枝分かれしてそれぞれが独自の展開をしていった。三谷さんはこれを「接ぎ木」と称されたのであろう。

私自身も学生のころ、制作にあたって東洋と西洋の美術に対する考え方の違いというか、断絶に近い溝を感じて暗澹としたものである。美術に興味を持ったきっかけが西洋美術、というかいわゆる洋画だったので、とりわけそうだったのであるが、何を描いても西洋の考えを模倣しているだけで、日本人である私が本物の作品など描けないだろう、という思いから表現方法に行き詰っていた。

この思いを払拭するために、私はドイツ留学を決意した。

「自分は日本人だがそれでも西洋美術から発展した現代美術の世界に興味を持っている。西洋美術が自分の表現にふさわしいかどうか、いっそ自分の眼で西洋世界を見て、感じ、その美術の神髄を自分なりに理解すればよいのではないか。そのうえで、日本人である自分が何を表現すべきなのか見極めたい。」

そういう思いでドイツに渡り、紆余曲折を経て、曲がりなりにも自分の表現を見出しかけていた頃に出会った三谷さんの「日本美術接ぎ木説」はまさに我が意を得たという思いであった。そうだ、自分はここにモヤモヤとした気分を抱いていたから、今こうやってドイツで制作活動をしているんだな、とようやく腑に落ちた。ドイツに渡って 10年以上が経っていたが、2005年の田辺市で私の留学生活は報われたといっていい。

以来、田辺市立美術館とそこに関係する方々には様々な形でお世話になりながら現在にいたっている。2010年に帰国し、和歌山を拠点に東京で作品発表を続けていたが、三谷さんとは作品を通して絶えず交流があった。またその間、田辺市で教育に携わる機会を用意してくださったり、折に触れ私の作品を啓蒙し続けてくださったりした方もおり、日本で制作活動を続ける上での心強い支えとなった。そして近年田辺市立美術館に着任された学芸員の知野季里穂さんのご尽力もあり2022年4月、特別展「湯川雅紀　2011-2022」の実現をみた。

最初に三谷さんにお会いしてから 17年の月日が流れたが、それだけの年月の積み重ねがあって、その間様々な人が私のことを気にかけてくださって、はじめてこれだけの規模と密度の展覧会が実現できたのだと感じている。現在の私のキャリアにとって大切な、欠かせない方々がこの展覧会の実現に向けて心を砕いてくださったことに、あらためてこの場をお借りして感謝の意を表したい。

そして自分はこれからも東洋美術と西洋美術が幸せに手を取り合って、一本の大樹のように雄大な風景を形づくる瞬間を待ちながら制作に勤しんでいこうと思っている。

田辺市立美術館でのアーティストトーク

（画家・関西福祉科学大学
教育学部教授　湯川　雅紀）

田辺市立美術館NEWS　ORANGE　Vol.37
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和4年10月1日

**田辺市立美術館**
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

**田辺市立美術館分館**
**熊野古道なかへち美術館**
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

### 編集後記

今号もお読みいただきありがとうございます。4月から新しい学芸員スタッフが加わりORANGEの執筆陣も多彩になりました。田辺市立美術館のある新庄総合公園は、全日本花いっぱい田辺大会に向けて賑やかになってきています。ぜひ一緒にお楽しみいただければと思います。皆様のご来館をお待ちしています。
（F.O.）

田辺市立美術館NEWS
# ORANGE
Vol.37

中野恵美子《連なる》 2007(平成19)年　田辺市立美術館蔵

## 作品制作と《連なる》について

織物といえば着尺か服地の時代に、2度目の大学でファイバーアートという新しい世界に出会いました。そのことが機縁で織でできることの新たな可能性を求めて「織造形」に取り組み始め、公募展に出品していました。自分の制作が表層的になったなと思った頃に、アメリカのクランブルック・アカデミー・オブ・アート（ミシガン州デトロイトにある大学院大学）に留学する機会があり、そこで制作を見直すことになりました。その後ブラジルに滞在することになり、環境の異なる生活の中で新たな試行錯誤が始まりました。アンデスのトレッキング、広いブラジルの大地での旅の印象から大地に関わる作品を制作しました。

材料の入手がままならないブラジルではサイザル麻を用いていましたが、「日本で材料を限ったら何がある？」と考え始めました。以前訪れた山形県鶴岡市の致道博物館で見た大福帳等使用済みの和紙が織り込まれた衣類が記憶に蘇りました。繊維素材が限られていることからの工夫ではありますが、その美しさが印象深かったのを覚えています。そこから身近にあった書道の和紙に行き着きました。帰国後、和紙で制作し始めましたが、伝統の基本も大事と思い、和紙を細く切り撚った糸を織る「紙布」の勉強もしました。

以前敦煌、鳴沙山の砂を顕微鏡で見たことがあり、砂に様々な色があるのに驚かされました。さながら一粒の砂にも大地生成の歴史が宿るようで、そのように織布に情報を内包したいと人類のエッセンスとも言える文字（写経による経文、元素記号等）を木版、シルクスクリーン等で和紙に刷ったものや書道の文字を用意し織り込みました。

さらに織物特有のテクスチャー（材質感、手触り感）を求め、伝統を応用しながら物理的変化を取り入れることに挑戦しました。強い撚り糸を用いた「縮み」という着物地がありますが、その強撚糸を用い、和紙を織り込み、さらに板締め絞りという2枚の板で布を挟んで染料に浸して染める方法を用いて、パターンの部分を板で挟んで、製織後温湯に浸けてみました。すると板で挟んだ箇所を残して全体は半分のサイズに縮み、和紙と強撚糸が生み出すテクスチャーが生まれました。

織は経糸と緯糸の交差でできています。緯糸をベースに絵を描くように織る綴織の世界と、経糸の浮き沈みで模様を出す組織織の世界があります。私自身は後者に関心があり、構造をベースに多層織に取り組んできました。「連なる」は四層織で仕上げています。連綿とつながる世界を表現してみました。

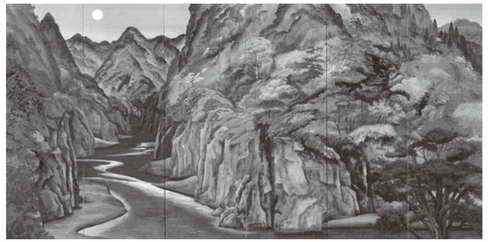
祈り、大地、文字をテーマに試行錯誤を続けています。作品制作は歩み続ける自己の変化を確認する行為とも言えます。一歩一歩歩みながら道標を立てているかのようです。
（中野　恵美子）

※今回特別に作者の中野恵美子氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

## 稗田一穂の画業

稗田一穂は、１９２０（大正９）年に現在の和歌山県田辺市に生まれた日本画家です。惜しくも昨年３月に満１００歳で逝去しましたが、１０代から最晩年まで、９０年近くにも亘って画家としての道を一筋に歩き続けました。

稗田の父は、若い頃に画家になる夢をもちながら果たせず、デザイナーとして仕事をしていました。その仕事の都合で、一家は稗田の幼少期に大阪市に出ひきます。この父の理解もあって、稗田は１０代の初め頃から画塾に通い始め、大阪市立工芸学校（現・大阪府立工芸高等学校）に進学します。そこで初めて日本画の制作に触れ、その画材に魅せられた稗田は、専門的に取り組むことを決意して、東京美術学校（現・東京藝術大学）に進みました。


稗田一穂《皎月》 1988（昭和63）年　　箱根・芦ノ湖 成川美術館蔵

稗田が美術学校に入る前年には、国家総動員法が公布され、在学中には太平洋戦争の口火が切られるなど、戦時体制が強まる中での修業はけして恵まれたものではありませんでしたが、卒業制作で川端奨学資金賞を受け、戦争が終わって間もなくに復活した官展、日本美術展覧会（日展）に入選を重ねるなど、着実に画家としての歩みを進めました。

画家としての大きな転機となったのは、１９４８（昭和２３）年に、山本丘人、吉岡堅二、上村松篁ら東西の日本画家１３名が、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期す」との綱領を掲げて旗揚げした「創造美術」の公募展に、西洋の童話のワンシーンを描くような斬新な表現の作品で応募して入選し、評価されたことでした。以後の稗田は「創造美術」の同志とともに、新しい時代の日本画の表現を切り拓いてゆくことに挑みます。その中で、特に現代的なモチーフと構成によって花鳥画の枠を広げる作品の制作は、稗田の個性的な芸術を確立するものとなり、画家としての地歩も固まりました。

稗田一穂《流翳》 1962（昭和37）年
和歌山県立近代美術館蔵

「創造美術」の活動は３年余りで終わり、１９５１（昭和２６）年に彫刻部、建築部を擁する洋画の団体「新制作派協会」と合流して「新制作協会日本画部」となりましたが、このとき稗田は同会の会員に推挙され、その後１９７４（昭和４９）年に同部が独立して「創画会」を設立してからは、名実ともに同会を代表する画家の一人として意欲的な作品を発表し続けました。

１９７０年代の末頃、稗田が還暦を迎える頃から、郷里、和歌山の熊野と、居住した東京、成城の風景が新たなモチーフとして浮かびあがり、花鳥画から風景の表現へと制作の主が移ってゆきました。以降の独特の詩情を有し、内面的な表現の深まりをみせる作品は、稗田の制作を代表するものとして高く評価されています。

最晩年まで自己の作品を厳しく見つめ直す姿勢を失わず、自身の表現を革め続けた稗田の９０年にも及ばんとする画業を、今秋から来年初にかけて、和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館が共同して開催する展覧会によってお伝えします。故人を偲び、その芸術を改めて広く紹介する機会にしたいと思います。

（学芸員　三谷　渉）

### INFORMATION

特別展
**稗田一穂展**

会　　場／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館
会　　期／2022年11月19日(土)～2023年1月15日(日)
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日(ただし1月9日は開館)・11月24日(木)
　　12月28日(水)～1月4日(木)・1月10日(火)
観 覧 料／田辺市立美術館:600円
　　熊野古道なかへち美術館:400円
　　※学生及び18歳未満の方は無料

◆田辺市立美術館では12月12日に一部展示替を行います。

## くまびで作ろう!

今年度から熊野古道なかへち美術館を会場にして、講師のアーティストと一緒になって作品をつくって公開するワークショップ「くまびで作ろう！」をスタートします。「くまびで作ろう！」は、「熊野古道なかへち美術館（くまび）」という小さな場所から、大きな「熊野の美術（くまび）」を作っていくことを目指してつけたタイトルです。

この「くまびで作ろう！」は 2019 年度から開催を予定していましたが、国内でも急速に広まった新型コロナウイルス感染症の影響で止む無く中止となり、その後も延期と中止が続きました。

昨年度の計画からはワークショップ開催の後に、講師に招いたアーティストの制作を紹介することを考えて、展覧会を開催する準備もワークショップの用意と同時に進めていました。昨年度末に予定していた「くまびで作ろう！」は残念ながら中止となりましたが、講師をお願いしていた和歌山県海南市の画家、湯川雅紀さんの展覧会は、この4月から6月にかけて開催することができました（今号のカラー面にレポートを掲載しています）。

今年度から「くまびで作ろう！」をもう一度仕切り直してスタートします。和歌山県湯浅町の美術家、妻木良三さんを講師に招いて、来年の3月に開催することを予定しています。

（学芸員　知野　季里穂）

会　　場／熊野古道なかへち美術館
ワークショップ／2023年3月4日（土）
作品公開／3月5日(日)～3月12日(日)
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／なし

## 雑賀清子のスケッチ

雑賀清子（1933 ～ 2017）は和歌山県美浜町に生まれ、女子美術大学の洋画科を卒業後、ベルギーでステンドグラスの制作を学んで帰国しました。帰国後は主に郷里で制作と指導を行っていましたが、1980年代のはじめ頃から、およそ30年間にわたって田辺市中辺路町周辺でのスケッチを重ねています。雑賀がスケッチの対象としたのは自然であり、それも華やかに咲き誇る草木ではなく、足下の小さな花や雑草でした。それらの草花に、雑賀は自分自身の存在を重ね合わせながらスケッチしていました。

雑賀はスケッチだけではなく、対象の印象を言葉としても残しています。《ふゆいちご》へよせた「凍けのこった雪の間からのぞく真っ赤な実と濃緑の葉のつやは冷えきった空気を静かに別世界に連れ去りそうだ」、《のぶどう》へよせた「青、紫、おしゃれだね」、《やまぼうし》へよせた「つい近寄りたくなる」などです*。そこには私たちが見逃してしまいがちな小さな存在や何気ない瞬間に、詩と生命を見出していた雑賀のまなざしをうかがうことができます。自然界の小さな存在を見つめ続けた雑賀のスケッチは、その温かなまなざしが形象化されたものと言えるでしょう。

この雑賀の植物スケッチを紹介する館蔵品展を、来年の2月から3月にかけて田辺市立美術館で開催します。雑賀が注目した、ひたむきに生きる小さな存在と、それが放つ命の美しさをお伝えする機会になれば嬉しく思います。

同時に、田辺市出身の洋画家、原勝四郎（1886～1964）の植物スケッチを特集する展示も開催します。速筆に植物の特徴をとらえるスケッチは、原の油彩画の表現にも通じるもので、確かな眼と画技がうかがわれます。

会期末の3月25日、26日には、美術館のある新庄総合公園で第61回全日本花いっぱい田辺大会が開催されます。これにあわせて、当館はこの２日間の観覧を無料にします。大勢の方々に、画家たちの植物へのまなざしを感じていただければと思います。

（学芸員　知野　季里穂）

※ここに雑賀の言葉を紹介した３点のスケッチは、いずれも今号の折込付録、一筆箋ミニの図版に使用しています。

### INFORMATION

館蔵品展
**雑賀清子 ―草花によせる―**

会　　場／田辺市立美術館
会　　期／2023年2月4日(土)～3月26日(日)
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日・2月24日(木)・3月22日(水)
観 覧 料／260円　※学生及び18歳未満の方は無料

**ORANGE Vol.37** 付録
**一筆箋ミニ**

本紙折込部分を点線に沿って切り離してお使いください。ちょっとした贈り物に添えたり、書類を送るときのメモにしたり、様々なシーンでお使いいただけるのではないかと思います。

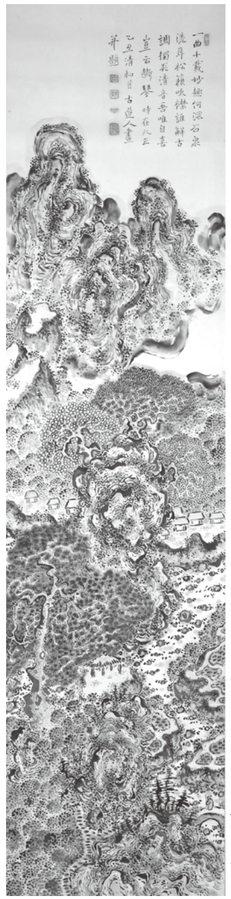
## 絵画と出会う「この一点!」

### 近代紀南の画家Ⅲ　福田静處

会場：田辺市立美術館
会期：2022年9月17日（土）～11月6日（日）

田辺市立美術館では、近代に紀南出身者で画家として活動した人物の軌跡を確認し、当時の当地の美術の動向と日本の近代美術史との関係を位置づけて紹介する展覧会シリーズ、『近代紀南の画家』を2018（平成30）年から開始している。３回目となる今回は、漢詩や俳句、短歌に秀で、絵画もよくした新宮出身の文人、福田静處（1865～1944 ／本名は伊佐次郎、別号に古道人・把栗など）の制作を取り上げる。

静處の表現は、中国や日本の詩文、絵画を広く学んで得た教養が基礎となっている。本作品の箱書には「大雅堂先生」の「筆意」にならうと記されており、江戸時代の文人画家、池大雅もしくは同門の系譜に連なる画家の表現に学んで描かれたことが示されている。画中に赤い斑文を付すなど、淡彩を用いた山水図のことを、静處は「大雅式山水」と呼んでおり、本作品でもそれが確認できるが、それ以外にも樹木、岩山の稜線の力強さ、墨の濃淡の使い分けによる光の表現は大雅の技法をうかがわせるものである。


福田静處《山水図》 1925（大正14）年　個人蔵

静處の書簡には、清貧の逸話が多く残る大雅の生き方に学んでいたことが記されたものがあり、「筆意」は絵画の技法に留まらず、静處が憧憬した大雅の精神性も含めて理解する必要があるように思われる。本作品が描かれた1925（大正14）年前後は、居住地京都にて妻子の看病に追われ、生活に困窮していた時期であった。

本作品に添えられた漢詩には、泉の流れや松に吹く風の音を音楽として独り楽しむ情景が詠まれているが、日々の諸事や、不況の中で生活のための資金繰りに追われていた静處の実生活は、画中の詩に謳われるような文人の理想とする喧騒のない隠居生活とは程遠いものであったはずである。

しかし、俗世から離れられない中でも古人に深く学び、その境地に至ろうとする静處の潔い姿勢が、本作品のような表現を生み出したのであろう。

（学芸員　糸川　風太）